○高水山産のチジレゴケ（水島うらら）Urara MIZUSHIMA: On *Ptychomitrium angustifolium* reported by Sakurai from Mt. Takamizu.

Ptychomitrium angustifolium (Okam.) Broth. は岡村周諦博士が *Glyphomitrium* 属の下で相模，山北産の標本に基づいて命名され，後にBrotherus により，*Ptychomitrium* 属に移された。又野口彰博士は邦産の *Ptychomitrium* 属を再検討された際，これを *P. sinense* Reim. の異名に落された。筆者も野口博士の扱いに同意見である。桜井久一博士は植物学雑誌 **53**: 247 (1939) にこの種が武蔵（東京都，西多摩郡，三田村）高水山に産する旨を報告しておられる。最近，都立大学牧野標本館の *Ptychomitrium* 属を検討している際に，この報告の基となった高水山産の標本をみる機会に恵まれた。これは不実の標本ではあるが一見して *P. angustifolium*，即ち *P. sinense* とは乾燥時の形態を異にしている。*P. sinense* では蘚座は小さな団塊をなし，各々の茎では葉が著しく内曲し，葉をつけた茎は殆ど直立して頂は円頭状に見える。然るに高水山産の標本では，蘚座はあまり密でなく，団塊にならず，茎は丈が比較的高くて彎曲し，葉は内曲せず，乾燥時に茎に圧着するかやや傾上し又は幾分鎌状に曲る。葉を着けた茎の先は丸くならず，ややふぞろいな筆の穂状をなしている。一枚の葉を取って見ると概形は *P. sinense* に似てはいるが，細胞は下部から側壁が波打って肥厚しており，明かに *Rhacomitrium* 属の一員である事を示している。葉先にはしばしば単細胞からなる透明尖があるが，不明瞭なものもあり，葉細胞は中部で長方形で，乳頭突起は *R. canescens* (Hedw.) Brid. 等に比すれば低い。これらの事から，この種は *R. heterostichum* (Hedw.) Brid. に近く，特にその変種とされている var. *nitidulum* (Card.) Nog. によく一致する。又この包の中には蒴をつけ，乾燥時に葉が著しくちじれる植物が少数個体あるのが認められた。蒴の基には明らかなコブがあり，これは *Onchophorus crispifolius* (Mitt.) Lindb. である。尚桜井博士の論文に引かれている異名の *Glyphomitrium linearifolium* Okam. は *G. angustifolium* Okam. の間違いである。ついで乍ら桜井博士の同定された *P. angustifolium* は殆どが正しく *P. angustifolium*，即ち *P. sinense* であって，高水山に産すると報告された標本だけが同定違いであったわけである。但し筆者は同山で *P. sinense* を採集している。

Rhacomitrium heterostichum (Hedw.) Brid. var. *nitidulum* (Card.) Nog. in Misc. Bryol. et Lichen. **15**: 2 (1958)——*Ptychomitrium angustifolium* Broth. sensu Sakurai in Bot. Mag. Tokyo **53**: 247 (1939) p. p.

Onchophorus crispifolius (Mitt.) Lindb. in Act. Soc. Sc. Fenn. **10**: 229 (1872) ——*Ptychomitrium angustifolium* Broth. sensu Sakurai, l. c. (1939) p. min. p.

（共立薬科大学）